

三十年の歩みを踏えて

三十年の歩みを踏えて

桃井観城

○

戦後の混乱にようやく復興のきざしが見えはじめ、戦災寺院の多くが復活再建して法灯は増輝せんとし、宗門においても宗報第一号の創刊、法要式の制定、法華宗婦人会の結成、教学審議会の再開、開宗七百年記念事業計画等躍進又躍進とその前途を大いに期待するに至ったのである。法華宗本門流の発展は宗門、僧俗の双肩に荷われ、特に青年僧侶に囑望せられるところとなったのである。かねてこの事を読みとってか、松井正純上人（宗務総監）は昭和廿四年十二月二十五日本能寺（貫首刈谷日任上人）に、学究青年僧の懇談会を開かれた。この時集るもの僅に八名で私もその中に加っていたが、何んのために集められたか、という程に気楽な会合で、午後は寺内泰徹本能寺執事のすすめもあって東山を散歩し清水の音羽茶店で、舌切餅を賞味しては論談風発、夜は夜もすがら経文読誦の声ではなく、若人の清新な雰囲気満ちた終日であった。このことが後に同学会と自称し、次いで桂林同学会、法華宗教学研究所の母体になるとは、誰もあづかり知るところではなかった。それでも一同は期せずして宗祖御妙判のポケット版（信徒用）を編集することを申合せたのである。それが同廿七年の春淡路本円寺で住職の花谷浩正君、田村芳朗君と私が最後の編集を終って同年十月一日刊行したのが『信仰のしるべ』——日蓮聖人御遺文要集——（本文一三三頁）であった。これ

は僅か三名のものの編纂によるのではなく、松井正純宗務総監がその跋文に「本書編纂に當つた桂林同学会は教学研究の目的を以て昭和二十五年五月結成されたもので、その主な会員は桃井颯城、花谷浩正、小島啓孝、芹沢泰寛、大平進龍、川口幸隆、片山輝彦、田村完勝（芳朗）の諸師であり、荻谷日任、株橋諦秀の両師がその研究の相談役として賛助している。この書は日蓮聖人開宗七百年記念事業の一部として企画されたものである……」とある。あれから三十年を経てその中には遷化、引退、脱宗、帰俗者等あり懐旧の情禁じがたいものがある。本書も絶版と聞いている。その内容を詳述する余白はないが、信徒用にとのこと、なるだけ「カナ」文字の多いという方針で編集したのも若い私達の考え方であつたと思う。今『信仰のしるべ』の目次をのぞいて見るとその扉には、御義口伝の「南無妙法蓮華経と唱えたまつる者は、如来と共に宿る者なり。朝朝、仏と共に起き、夕夕、仏と共に臥す。」とあつて、第一章信仰のありかた、第二章人間のありかた、第三章実践のありかたと容易に信仰を身につけられるように編集したものである。人曰く「ありかた」ではなく「ありがた」集だネ：まことにその通りであつた。

この出版をまたずして小笠原日堂上人（学林教授・宗門史編纂者）が遷化（同二十六年二月二十五日）され宗門の一隅に空洞の出来たのを覚えた。その忌中に松井正純上人は「小笠原（宗門）年表」を発見され、本能寺晋山後宗門からの要請を入れて同三十一年十二月一日宗門史編纂事務局の主任に就き、日吉憲孝、芹沢泰寛、福島泰信三君と私を委員に、更に同三十四年には四大本山の貫首と学林長を顧問に、松本日宗君を委員に岡沢海宣君を書記にと事務局（本能寺内）はようやく編纂活動に入った。又同年田村芳朗君（現東大教授）は東洋大学に出講する等いづれも同学会メンバーが内外に於て精力的に活動することになつたのである。然しこの間桂林同学会の開催は見送られて来たが、同三十三年八月二十五日に桂林同学会復活第一回の総会が光長寺で、第二回がその翌三十四年八月二十四日～六日本興寺で開催され、新たに松本日宗君が会員に加わつた。それ以後、四大本山が毎年交替で当番を引きうけ、会員は年毎にその研

究の成果をあげるようになったのである。同会の会報第一号（同三十三年九月五日付）によると、「先に第六次宗会の承認を得て、数年間中絶していた、桂林同学会の再発足、第一回会合が新たな構想の下に左記十二名の教師を選定して再会されることになり……」そして会員名簿には赤田泰円、石田智清、大平進龍、川口善教、芹沢泰寛、田村完勝（芳朗）、豊島正典、成瀬英俊、花谷浩正、松井孝純、和田晃岳、桃井観城各員の氏名とそれぞれの生年月日、出身校名、現住所、現職、学林及び各大学の卒業論文の論題等が懐しい思い出を物語っている。

ついで同三十五年四月二十八日の宗旨建立記念日には『桂林学叢』を創刊し、各員の研究を初めて対外的に発表したのであって、「金剛院日与上人について」（桃井）「本果院日朝上人について」（芹沢）「本化折伏論概説」（成瀬）「大乘非仏説論をめぐる諸問題」（川口）そして特別寄稿として「総別問題を中心にしての本宗教義」（荻谷日任上人）が掲載されたのも十八年昔のことであった。尚日時を同じくして『法華宗質疑明解』第一集が各員の解答執筆、荻谷、株橋両師の監修にて法華宗布教教学振興会より発刊され福島泰信宗務総長の努力が実を結んだのである。案外的好评にて第二集信行篇、第三集続信行篇、第四諸集、等を続刊することが出来、宗徒の各位に報謝出来たことを喜ぶものである。一方同年十月十三日教学布教研究会（松井孝純・赤田泰円・近藤文政発起人）が学階試験問題集に続いて、『隆門論叢』を発行する等宗門は教学・布教に活気を呈し開宗七百年記念の御報恩を期したのである。同三十七年には三浦成雄、荻谷玄翁両君が研究員に加わった。これに先んじて宗門史の編纂事業は資料の聚集に全力を挙げ、日吉憲孝師の遷化後、松本、芹沢、桃井のコンビは意気投合して、同三十五年三月二十九日より大本山光長寺をはじめ、山梨妙法寺、常在寺に格護された御本尊、古文書、古記録集等の調査、撮影、同四十五年に至る間鷲山寺、本興寺、本能寺三本山はもとより、大沼田檀林を探訪して篤信石井与一郎氏所蔵の文書から同檀林の貴重な資料を発掘した。例えば檀林五十八世日崇上人の過去帳本尊には檀林生徒の法名が列記され、能所の関係が敬慕されるのみならず、そ

の下に「畑中逝」「城之内ニ法名のテ逝」「川死」「浜宿ニテ逝」「田死」等の悲しい文字が学途半ばにして自決した（留年を恥じて）清純な学徒の血涙に合掌唱題したのである。高松市本覚寺（和田晃岳住職）では戦災で死守した御宝蔵中から金岳公子の蔵書、著述等が大部にわたって発見され、数々の宗宝が各所で提供される等、宗内各寺院の協力、支援によって着々と新資料が集積され、その記録、写真の解読に精魂をかたむけ、松本委員は遂に視力障害に苦しまねばならなかった。然し資料の整理、保存、年表編纂等本格的な事務局の運営のために、委員に松井孝純、助手に三浦成雄同福岡淳翁三君の増員により同四十二年七月以降専ら『法華宗年表』の作製に専念し、法華宗管長松井日宏殿下はもとより寺内泰徹上人（法華宗財務部長、本能寺執事長）の甚大な協護により同四十七年五月二十三日『法華宗年表』（本文三九四頁）一巻が上梓され宗門史の第一段階が出来たのである。然しこれは宗門史の大動脈を敷いたものに過ぎない、今後は各地域からかくれた資料を発掘するために、各聖の協力にまっぴら完璧を期したいものである。そこで大方の要望に答えて、宗門史談会が翌四十八年四月に発足し、同十月一日に『宗門史談』が創刊され各方面からの入会があり、現在会員三〇〇名に達していると聞いて、新資料の提供を期待している。この間同三十九年には片山郁朗君、同四十一年には中村宏龍君、同四十三年には森智洪君、同四十六年には小西徹龍・大平宏龍両君が、それぞれ研究員に加わった。

宗門史の編纂と平行して学林在職の各員が日夜涙ぐましい努力により、絶版になっていた『法華宗本門弘経抄』十巻の再版が完結し、殊にその付録の作製は、原本との照合に心血がそそがれ、百十一頁にわたる正誤表が完成され、大聖人御降誕七百五十年奉讃事業の随一に挙げられるべきものである。

これ等の大事業が次々に貴重な成果をあげるにはその母体が既に出来ていたことを見逃してはならないと思う。即ち第十二次宗会（同三十八年六月一日福島泰信宗務総長）は「法華宗教学研究所」の設立を決議し、（その規約は田村、芹

三十年の歩みを踏えて

三十年の歩みを踏えて

沢両君が主力を注いで出来た。初代所長には、株橋学林学監が就任し、構成員には桂林同学会員が充てられ、前例の如く東西の四大本山の輪番護持の下に、毎年(の総会には(芹沢、松井、私の発想)所員、研究員の研究発表が喝望せられ、シンポジウム、所会、総会等により研究所はその機能を十二分に發揮するのみならず、昭和四十八年には福岡淳翁君が、同四十九年には鈴木随順君が逐次入所して総員十六名はその専攻を生かして、教学、宗門史、仏教学、文化等の各部門に実績をあげ、去る五十一年第十四次研究所総会を本興寺において開催したのである。毎回の記録は学叢各号の末尾に掲載されている。その学叢も本年第十号「回顧と展望」の記念特集を發行する迄に發展したのである。なお、同五十一年には松本日宗君が名誉所員に推挙された事も記しておきたい。

○

願れば本能寺現貫首松井日宏上人の發想により、去る昭和二十四年の青年学僧懇談会に端を發し、桂林同学会、法華宗教学研究所へ發展、凡そ三十年を経過し、その間紆余曲折はあったが、それぞれの業績をつみ重ねることが出来たことは、宗門未曾有の法慶で、先覚者の指導よろしきを得たことはいうまでもなく、宗門及び各大本山当局、宗内各寺院住職、檀信徒各位の絶大なる御協力、御鞭撻のたまものであることを感銘し深謝するものである。我々はこの庇護に甘えることなく、研究所各員の精進努力に宗門各聖の絶えざる御協護を仰いでやまぬものである。

それでは今後の課題を考えてみると、

1 所長講義によって、本宗教学の根幹を披瀝して研究の指針を示し、将来の方向づけを願いたい。一朝一夕のことではないと思うが、宗門發展の基盤はここにあると信じる。

2 桂林学叢の年刊。これには全員の執筆協力が第一に必要であることは言う迄もない。研究発表のレジメ(プリント)は教学審議会や宗会には提出され、宗報にも発表されるようになったが、毎年のシンポジウムにも貴重な発表

が多々あるので、学叢にその概要でも掲載出来れば裨益するものと思う。いづれも編集委員各位の法勞にまつものである。

3 布教研究部門の新設。これは屋上屋をかさね、それだけでなくも宗門の仕事は多すぎるとの御意見が強いと思うが、教学研究のあり方には限度があることはいう迄もない。一般学会の研究所とは勿論その目的を異にしているとはいへ、宗門の發展は布教にあることには問題はない。布教の原動力は教学の樹立で、教学の研鑽は教学研究所の任務であるとするならば、所長講義をはじめ、各員の貴重な研究は研究所に温存蓄積するのみではなく、許される部分は布教の実践に活用されるべきではないか。医学会では病理学の研究実績が臨床医学に応用実践され医学の進歩がある。今や仏教各宗団にあってもこの問題が緊急の懸案となっているのである。

4 人材の発掘。我々の教団は教師数一千人に満たない小教団で、しかも寺院の格差は大であるにもかかわらず、心ある教師の内には地道に教学の研鑽がなされている。曰く御妙判の現代語訳、曰く教学の現代的展開、その他の面で注目すべきものが多々あると思う。これ等の研究活動を見捨てることなく、宗門の機関において助成、教導して、教学、布教の信解に新機軸をもたらすべきではないか、その発掘にも研究所の熱意を訴えるものである。特に研究所に入所出来ぬ事情のある教師に注目して、少ない教師各人の特質を遺憾なく發揮させ、小教団の明日への發展に資せられたいと念願する次第である。

5 御聖教の活用。宗門史は前掲の如く『宗門史談』を中心に、各方面からの新資料が提供され将来への期待が大きいのである。それと時を同じくして完結した『弘経抄』十一巻は、発刊の趣旨にのっとり、大いに研鑽されなければならない。私も本箱に入れたままの状況で申訳なく思っている。正直いって御聖教を拝読する諸条件にかけていること、第一そのテクニクが難解でどうにもならない点が多い。せめて輪読会、研究会が、中央（学林又は研究所）地

三十年の歩みを踏えて

方（碩学）を中心に、年に一、二回でもよい色んな難関を克服して持たれたと思う。然しそれには文部省ではないが指導要領的なものが要求される。大変なことになって来た。どの道もけわしいが、中央、地方の篤学の士に御法勞を仰いで、宗門百年のために『御聖教辞典』を編纂していただき度い、勿論その下仕事については、研究所全員が協力すべきである。先づ『弘経抄』十一巻からはじめようではありませんか。大方の御賛同を乞うと共に、宗門・学林当局の特別の御協力を懇願するものである。名づけて『法華宗辞典』（昭和二十五年一月五日発想）という、これこそ宗祖七百遠忌記念の大金字塔でありたい。

以上大凡そ日頃愚考するところを率直に述べ御批判を願ひ度いのである。いづれにしても我々の研究は三十年の歩みを回顧しながら、それをふまえて、宗門発展のいしずえ、人柱とならなければならぬ。その道標を掲げて御教導を仰ぐものである。

我々は教学の基本的な研究に全力を傾倒して、一意専心、行学二道の確立に寄与すると共に、その基本的な研究成果が、教徒の信行生活に不退の信仰を植えつけることを念願して、研究所の活動をよどみなく読けなければならぬと信ずるのである。

以上編集部の求めに応じて、法華宗教学研究所の「回顧と展望」を略記する次第である。御叱正を乞う。

五二・五・三〇